

<平成27年度日本語学校教育研究大会趣旨>

大会テーマ『日本語学校8万人のビジョンを考えるⅢ

～新しい日本語学校教育の質のかたち～』

大会委員長 江副隆秀 (新宿日本語学校)

学校教育は、運営者、学生、教授者、教育(手法・内容)の四つがバランスよく揃わなければ理想的な形にならない。日本語学校の場合も同じだ。いくら優秀な経営者がいても、海外の環境を熟知していなければ手腕は発揮できない。個人的にいくらいい先生でも、学校という職場を離れると、クラス授業での活躍の場を失う。それ以前に、学校があろうが、いい先生がいようが、日本語を学ぼうという学生がいなくなれば、日本語教育機関は成立しなくなる。

震災以降数年が経ち、来日学生が急増し、同時に急激に多数の日本語教育機関が誕生している。この現実を前に、我々はバランスよく環境を整える準備ができているのだろうかと思わざるをえない。急増する学生達と日本語教育機関は、それに対応できるほどの日本語教師を準備できていたのだろうか。

「日本が好きです」とか「日本で日本語の勉強をしたい」という来日希望者が、様々な障害を乗り越えて実際に来日しても、実際に日本語教育機関に入学しても、「自分の期待と合っていなかった」ということが発生することもある。しかも、最近はその傾向が増加していると伝聞で聞く。それは、日本語教育機関にも残念なことだが、それより学生本人にとって、悲劇的な結末を迎える可能性もある。

平成27年度日本語学校教育研究大会においては、過去の日本語教育機関の歴史も踏まえつつ、国内外で教育機関や教授法そのもので発生していることなども総合的に捉え、参加者の方々が本大会に参加した後、その翌日、再び教壇に立つ時に、何らかの役に立つ情報を汲み取っていただきたいと願っている。

更に、昨今は、日本語教育だけでなく、教育全般がICT技術を取り入れる方向に向かっている。時代に合った教育でなければ学生の要求には応えられなくなるのは時間の問題だ。

そうしたことを総合的に捉え直しながらこれからの日本語学校教育を問おうとするのが今年の日本語学校教育研究大会の趣旨と言えるだろう。

体の栄養を考えてもわかるように、バランスというのは、全体を考える時に無視できない考え方だ。日本語教育、日本語学校もその点は同じであると言える。